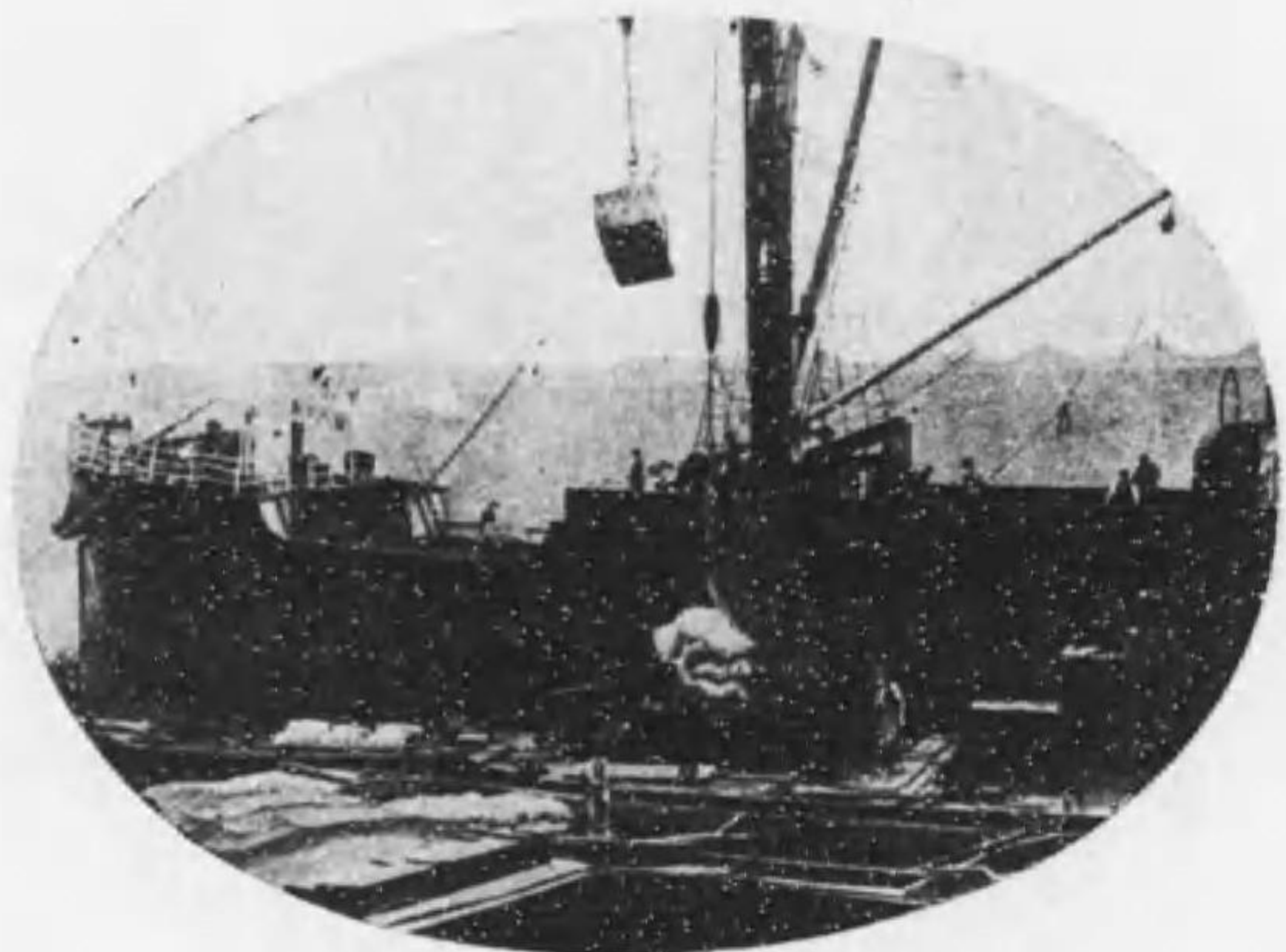


いふのが確からしく思はれる。天文十二年といへば西暦一五四三年で、即ちヴァスコ・ダ・ガマが喜望峯を廻つた時から五十六年の後である。而して天文十八年には有名なる西班牙の宣教師ザビエルが九州へ来て教へを説いて居る。斯くして葡萄牙、西班牙、和蘭の三國人は交る／＼吾が國へ来て或は耶蘇教を弘め或は貿易をした。其後徳川時代に入つて寛永十四年に島原の亂が起り、翌年に至り平いだか、是は耶蘇教徒が主謀者と認められたところから耶蘇教嚴禁と共に、外國との交通を止めやうといふ方針となり、愈々鎖國となつたのは寛永十六年七月の事である。天文十二年から數へて、凡て九十六年間である。此の九十六年間に於て彼等西洋人に別段構暴の事もなかつた。尤も彼等三國の間に互ひに勢力争ひをして、見苦しい紛擾を起したことはある。又彼等の説いた耶蘇教の教義が日本の國民性と一致するや否やは別問題であるが、兎に角彼等が策畧を弄して吾が國に迷惑をかけたなり、侵掠的行動を現はしたりすることは無かつたといつて宜い。けれども日本以外の國に於ては彼等の態度が斯う神妙ではな

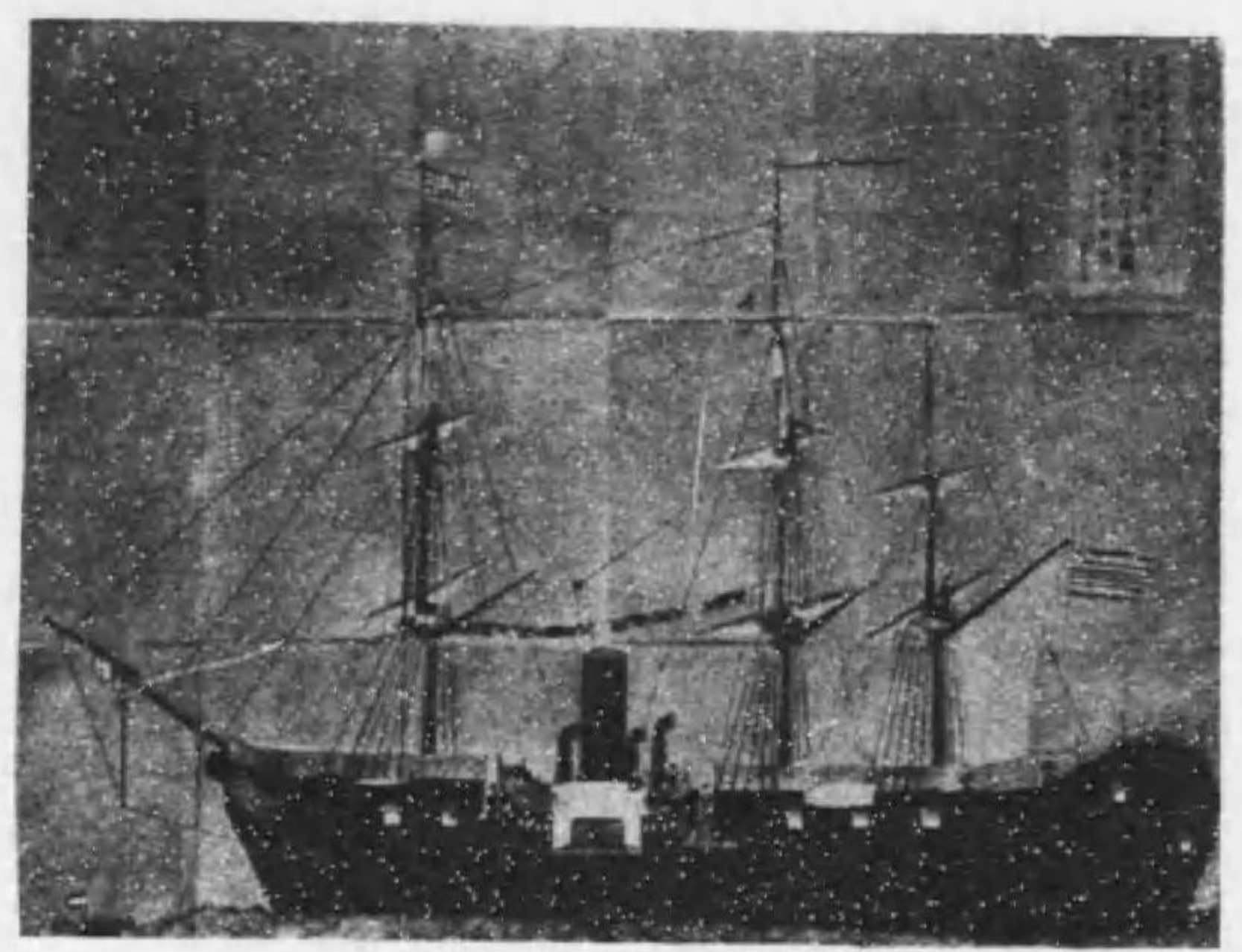


英國商船の圖

かつた。決して彼等は正義人道を守つたとはいへぬ事實が多かつた。彼是する間に歐洲の第一流に居た三ヶ國は漸く勢力を失ひ、第二流であつた英佛等が之に代るやうになつた。一五八八年八月に西班牙から英國征服の目的を以て送られたる所謂『必勝艦隊』が美事に英國の爲に打破られたのは、英國が將來海上に大飛躍をすべき土臺となつたものであるが、獨り西班牙のみならず、葡萄牙や和蘭も此頃から段々に下り坂になつて來たのである。而して之に代るべき英佛二國は何れも著々として東洋發展の計畫を立て

た。吾が國に於ては國內の問題が紛糾して居た間に、彼等はズン／＼と其の手を延して來た。即ち慶長五年、徳川家康が關ヶ原で石田三成を打破つた。その同じ年に英國では東印度會社を立て印度との交通を盛にすべき計を定めた。同九年に至つて佛國でも同じく東印度會社を創立した。一方には露西亞の東方へ發展して來べき機運も次第に熟し、一六四八年(日本の慶安元年)の頃にはペーリング海峡を發見し、一六五五年(明曆元年)に至つては露西亞政府から公然と使を支那に派遣して居る。

此より後三百年ばかりの間に、彼等白人の力はスツカリ東洋方面に延びて、動すべからざる根柢を作つてしまつた。英國は印度を其の屬領とし、露國はシベリヤ地方に勢力を扶殖し、佛國は印度支那を其の屬領とし、それに少しく後れて米獨の二國も盛に活動して或は土地を取り或は利源を開拓した。東洋諸國の人々が彼等によつて新知識を與へられたことは數へ切れぬ程であるが、大體に於て彼等の勢力擴張の爲に採つた方法は、正義をも人道をも無視したものといはなければならぬ。例へば印度が英



ペルリ來朝の圖

國の領土となつたのは印度總督ワーレン・ヘスチングスの力に依るものであるが、此のヘスチングスは功を樹つる爲に有らゆる謀略詭計を用ゐ、其の行爲は英國の國會に於て「人道に反し英國の名譽を毀損するもの」と認められたのである。斯くしてヘスチングスは排斥されたけれども英國は印度を自國の屬領として平氣で居るのである。佛露等の國々の爲す所も之に類するものである。

吾が國は徳川三代將軍の時から鎖國の狀態を續けて居たのを、米國の大統領がペルリを派遣して開國を促したので、世界と交通する

やうになつた。それでペルリを吾が國に取つて大なる恩人だなどいふ人もある。ペルリの携へ來つた國書には「今日世界に國を立て居る以上は互ひに交通して福利を共にすべきである。是が世界の公道であるから、日本も之に従はなければならぬ」といふ意味の事が述べてある。けれども米國が日本に對して開國を促したのは、決して日本の爲を圖つたのではない。彼國自身が東洋に於て活動をする上に於て、日本の門戸を開かしむることが得策であつたからである。既に支那との通商貿易は英國に先鞭を着けられて居るのであるから、日本の門戸を開かせる事は是非とも米國が率先してやらなければならぬといふ意氣込みでペルリを送つたのである。されば彼の態度は徹頭徹尾我に對して強制的であつて、眞に我に對して好意を有するものとは如何しても認められぬ。たとへ一時的にもせよ、沖繩や小笠原島を武力によつて占領するが如きことをしたものを「平和の使」とは如何しても考へられぬではないか。孝明天皇がうたでやむものならなくから衣いつまであだに日を過すらむ

と御詠みになつたのも、當時の事情としては誠に御尤なる次第と思はれる。

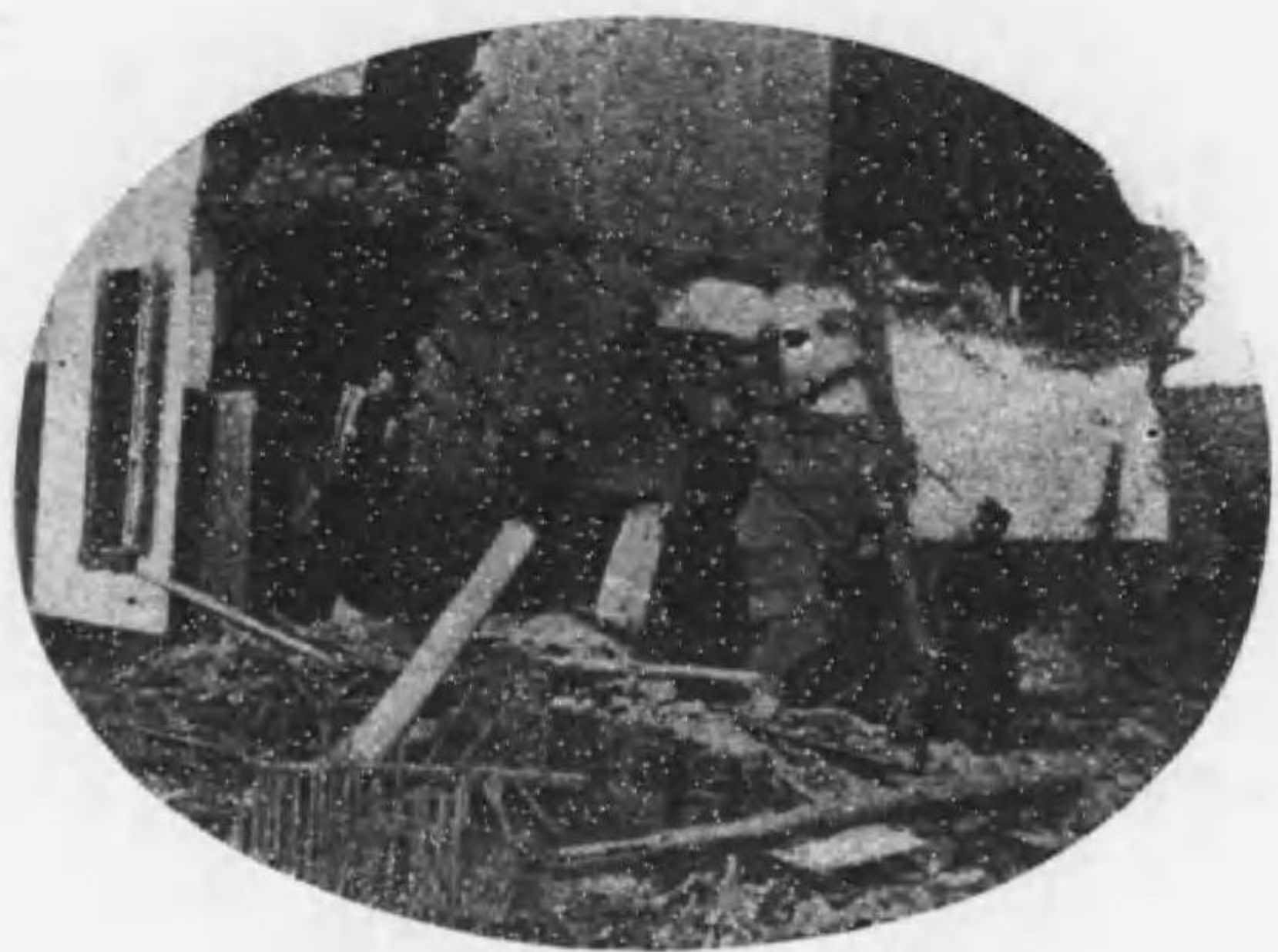
余は此の如き事を説いて、徒に排外的の思想を鼓吹する考へではない。世界の平和を熱望することに於て、余は何人にも譲らぬことを自信する。唯だ余は吾が日本國民をはじめ、東洋諸國の國民が互ひに其の現在の地位を理解し、相協力して彼等白人の壓迫に對抗すべき道を講ずることを、世界の平和のために熱望する者である。眞の平和は妥協で得られるもので無い。妥協的の平和は互ひの利害が甚しく衝突する時に於て、何時でも破らるべきものである。正義の主張が何處までも貫徹する時に、初めて眞の平和が得らるゝのである。何となれば平和を得るためには各自に私心を棄てなければならぬ。各自に私心を棄つことは、正義を尊重するによつて初めて能くせらるべきである。聖徳太子の憲法第一條に

人皆黨有り、亦た達者少し。是を以て或は君父に順はず、乍ち隣里に違ふ。

とあるは、獨り一國の中のみならず、各國の間にも極めて適切である。達者少しとは

一七二
即ち私心を捨て得ぬのである。私心ある者が相集れば、その集團的勢力を利用して他
を壓迫し、之によつて自己の利を得やうとするに極つて居る。世界に平和の望まれぬ
のも畢竟之が爲である。

但し彼等白人の間に於ても正義人道が重んぜられぬといふわけでは無い。又個人的
には品格もあり情誼も厚くして、模範的人物として仰がるべき人が決して少くはな
い。たゞ其の國際的の競争のあまりに劇烈なる爲に、目的の爲には手段を擇まぬとい
ふ迄に立到るのである。而して前から述べ來つた通り、彼等は皆東洋の天地に向つて
其の手を延し、此處で得た所の利益を以て其の本國を富強ならしめんと努めて居るの
である。それ故に東洋に於ける活動に就て、彼等の間に行はるゝ競争は殊に劇烈であ
る。前にいつた英國の印度に於ける横暴の行ひも、佛國の勢力を驅逐して自分の國の
みが印度に勢力をふるひたいといふ望みから、極端な事までが行はれたものと思はれ
る。



歐大洲の圖

競争が非常に烈しくなつて、「是非とも勝た
なければならぬ」といふ場合になると、正義
も人情も暫く忘れられてしまふ。例へば歐洲
大戦争の終りに於て、獨逸が屈服して和議を
申込んだ時に、佛國の之に對して與へた答へ
の如きは、いかにも冷酷なるものであつた。
其の數へ上げた條件の中には「カイゼルの罪
を糾弾するつもりであるから速に引渡せ」と
いふ一條もあつた。吾が國の武士道からいへ
ば、いかに戦勝つた場合と雖も、敵軍の總大
將には相當に體面を保たせるやうにしてやる
べきで、例へば秀吉が毛利氏を攻めた時に別

所長治は三木の城を守つて之に抗したが終に力屈して、秀吉に使を送つた。その趣意は「主將としての責を負うて自分は自殺するから部下の者の命を助けてくれ」といふのである。秀吉は之を快諾して、彼に酒肴を贈つた。長治は悦んで之を受け、部下の士卒と共に酒宴を催し、終つて自殺したのである。斯く敵味方となりながらも互ひに武士としての面目を保ち、また保たせることを忘れぬといふは、まことに奥ゆかしい事である。然るに彼の西洋諸國の間には此の如き情味が全く見出されぬ。

是れは畢竟數百年來互ひに國勢の伸長といふことのみを念とし、競争に競争を重ねて來たが爲と思はれる。英佛と獨逸とは同じ白人の國であり、同じ宗教を奉ずる國である。それですら一朝敵味方となる時には、此の如き冷酷の態度に出て敢て怪まぬのである。彼等が異人種たる東洋人に對して種々なる横暴を働いて居るのも怪むに足らぬ次第である。今や此等の國々は久しい戦亂によつて受けたる損傷を漸次に回復して、何れも再び東洋方面にその力を伸して來やうと努力して居るのである。數百年の



像肖のルーゲンチイナ

前から彼等は東洋に於ける活動によつて多くの利益を得、之によつて其の本國を盛にすることが出來た。これは彼等の忘れんとしても忘れ得られぬ事である。彼等は自分達の間に非常なる戦亂が起つた爲に、已むを得ず暫くの間は東洋に於ける活動を中止して居たけれども、多少なりとも其の國力を回復するに隨ひ、再び前日の活動を續けやうとするのは自然の勢ともいふべきものである。

東洋に其の勢力を伸して來やうとするのは一國ではない。先づ英佛獨米伊の五ヶ國は、何れも相競うて東洋發展を謀るものと見なければならぬ。此等五國の國力は決して同等ではないけれども、何れも必死の勢を以て發展を圖るのであるから、其間の競争は年を追うて激烈になるものと見な

ければならぬ。其の競争の熱度が非常に高まるならば、如何なる變事が起らぬともいはれぬのである。勿論何れの國民と雖も平和を望まぬものは無い。戦争の慘禍を目撃した者は、誰でも斯んな事をまた繰返すに忍びぬといふ考へを起す。それ故に大戦争のあつた後では必ず平和運動が非常なる勢力を得るのである。その平和運動によつて種々の弊害が矯正されて行くことは争はれぬ。彼のクリミア戦争の慘状を見て歸つたナイチンゲールの熱心なる努力が、赤十字社の根柢を作つた如きは、その最も著しい例であらう。しかし國際に於ける競争の熱が緩和されぬ間は、平和運動もなかく徹底的の効果を見るには至らぬものである。戦争の慘状に就ての記憶は歲月を経る間に幾分かづゝ薄くなる。一方には國際の競争が益々度を高めて白熱的の状態となる。斯くして又もや悲惨なる戦争を繰返さなければならぬのである。今日までの歴史はよく此事を證據立てゝ居る。

此の國際の競争を止めさせることは今のところ到底不可能であるが、其の競争の結

果が戦争といふ慘劇を惹起すに就ては、特に考へなければならぬ事がある。それは勢力の微弱なる國がいつも禍亂の中心となるといふ事である。若しバルガン半島に一大強國があつて、ドツシリとあの地方を抑へて居たら、歐洲大戦争も起らなかつたであらう。何處にでも弱い處があると、其處へ周圍の強い力が加はつて来る。その強い力の競争が遠慮なく行はるゝ結果として戦争ともなるのである。されば彼の白人の國々の力が東洋に伸びて来るに當つて、東洋の主人公として自ら任ずる國があつて彼等に對抗し、彼等をして無遠慮なる競争を敢てせしめぬやうに、彼等を牽制して行くことが出来れば、その競争の極端まで行くのを防止し得らるゝであらう。若しそれが出来なければ彼等の競争は次第に烈しくなつて、或は第二の世界大戦争が東洋を舞臺として演ぜらるゝに至るかも知れぬ。斯うなれば東洋諸國の不幸はいふ迄もなく、彼等白人の國々の爲にも大なる不幸である。

されば彼等の力に對抗して東洋の平和を保つのは、即ち世界各國の幸福を保全する



旭日に櫻の圖

一七八

所以である。東洋諸國の國民は大に此處に覺醒する所がなければならぬ。但し東洋諸國の覺醒といつても、之を指導し之を誘掖する國がなければ決して實現せらるべき事でない。然らば之を指導し之を誘掖すべき國は何れの國であるか。その國は歐米諸國に對抗すべき實力を有する國でなければならぬ。又自國の領土を擴張せんとするが如き野心なく、飽くまで正義の上に立つ所の國でなければならぬ。此の任務を全うする國は世界の平和の基礎を固くする國であるから、永く世界の先進國として仰がれ、模範的大國として尊敬せ

らるべきものである。此の光榮ある地位に立つべき國は吾が日本國以外に、何れの處にも之を求むることは出来ぬのである。日本の國體が此の大任を果すに適して居る。日本が正義を以て終始せる二千數百年の歴史が之を保證して居る。此の大任を果すことが日本國民の理想でなければならぬ。

朝みどりすみわたりたる大空のひろきをおのが心ともがな

といふ明治天皇の御製は、吾等の理想を御詠ひになつて、まことに遺憾なきものと申すべきである。

九 生きがひある一生

「大器晩成」といふ古語があるが、大なる人物は種々の艱苦の間を経て鍛ひ上げらるべきものであるから、久しきを経なければ其の眞の價値の顯はれぬ筈である。是れは一個人に就てもいひ得らるべき事であるが、一の國民に就て考へて見ると殊に適切な

語と思はれる。古より幸運によつて其の實力以上に發展し、一時榮華を極めた國もあるが、其等は決して久しきを保つことは出来ぬのである。多く苦しみ多く惱んで、其中を立派に通じ抜けて来た國が永く大國として仰がるのである。斯く考へ來つて吾等は今、多事多難なる日本國に生れて來たことを深く感謝しなければならぬと思ふのである。

彼の白人の國々が東洋に於て横暴なる振舞をしたことは前に述ぶる通りであるが、獨り吾が日本國は他の諸國の如き甚しき屈辱を受けずして今日に及んだ。しかし維新前後に於ける諸外國の態度の如き、また日清戦争以後に於ける三國干渉の始末の如き、憤慨すべき事は決して少くない。又最近に於て米國が平和會議を開いて各國海軍力の制限を提唱し、吾が國にも随分無理なる要求をして置きながら、自分の國では非常なる勢を以て飛行機隊の擴張を謀つて居るが如き、憤慨すべき事の限りともいふべきである。けれども吾が國の態度は飽くまでも君子的でなければならぬ。暴を以て暴に報

直清撰文以書其後想昔為幕臣事
處於國竊見其用意於治之深日又蓋
庶之取人用材必皆英偉俊傑一時之
選而一藝偏長之士亦無不齋焉豈非狀
之廣而擇之精者乎其收天下之書亦由

新道爾遠言曩昔之所見以塞今者之盛

享保二年歲次丁酉秋七月三日

英賀室直清謹識

室鳩巢の筆蹟

ゆる如き卑劣なることをしてはならぬ。室鳩巢は徳川時代の儒者の中で殊に君子として知られた人であるが、其の子弟を戒めた歌に、

ならばはじな兒の手がしはの二おも
て身は葛の葉のうらみありとも

といふのがある。他人に對して怨みがあつても、卑劣な陰謀などによつて其の怨みを報じてはならぬとの意であらう。まことに尤もなる教訓である。

但し他の横暴を許して其儘にして置くのは、即ち其の横暴を是認すること

になる。それは社會の正義を頹敗せしむる原因となる。されば彼をして反省せしむる方法を探ることは極めて必要である。吾が國の世界列強に對する態度もまた此の如くなるべきである。我は我が實力を充分に養ひ、我に對して不正を加ふる時にはいつでも之を拂ひ退くべき氣勢を示して、彼等の反省を促すことが肝要である。これが吾が國自身の爲であるのみならず、吾が友邦たる東洋諸國のためである。先づ何よりも大事なのは實力の涵養である。實力と一言にいふが、その内容は單純でない。學問に於て藝術に於て、事業に於て、何れも彼等に對抗し得なければならぬ。商工業に於ても兵備に於ても彼等に對して遜色があつてはならぬ。殊に大切なものは國民の道德的向上心である。國民の心が日に日に腐敗して行くならば、如何に多くの富を積み、如何に精銳なる武器を整へてあつても、國は衰微に向ふべきである。

今日に於て特に意を注ぐべきは青少年の教養である。詔書に仰せられたる『國民精神の剛健』といふことを青少年教養上の第一條件としなければならぬ。余は橋本左内



橋本左内の筆蹟

の遺著なる『啓發録』を讀む毎に、いつも非常なる感激を覺えるのである。彼は越前侯の家臣で、其家は代々醫者であつた。彼は後日に至り藩主春岳公の知遇を受け、國事に奔走して大功を樹てたのであるが、其の少年の時には一生を醫師として終るのを残念に思ひ、頻りに煩悶した様子である。此の啓發録は嘉永元年、即ち彼が十五歳の時に自ら心附いた所を書き止めて置いたものであるが、その卷末に次の如き語がある。

余嚴父の教を受け常に書史に涉り候處、性質疎直にして柔慢なる故、遂に進學の期なき様に存じ、毎夜臥衾中にて涕泪にむせび、何とぞと

して吾身を立て、父母の名を顯はし、行々君の御用にも相立ち祖先の遺烈を世に耀し度と存じ居り候折から、遂々吾身に解得致し候事どもこれあり候様覺之申すにつき、聊か書記し後日の遺忘に備ふ。敢て人に示す處にあらず。嗚呼如何せん、吾身刀圭の家に生れ、賤技に局々として吾初年の志を遂る事を得ざるを。然れども業とする所は此に在りても、志す所は彼に在り候へば、後世吾心を知り吾志を憐み、吾道を信する者あらん歎。

是が僅か十五歳の少年の語である。余輩の如く四十五十にしてなほ碌々として爲す所なきものは、之に對して慚死しなければならぬ。

今日は其頃と時勢がちがふ。橋本左内の如くに政事上のことに奔走せずとも、各自の業に全力を注ぐことが即ち國家に貢献する所以である。左内も今日に生れたなら甘んじて醫師となつたであらう。唯だ其の少年の時から力を盡して國家に貢献しやうといふ志の、確乎として抜くべからざる者のあつたことを、今日の青少年の人々が仰

いで以て範としなければならぬのである。學問も技藝も之を運用するものは人である。人として世に立つ上に確乎たる覺悟がなければ、徒に一技一藝をのみ能くするとも、決して頼もしい人とはいはれぬのである。大正十二年十一月の詔書の中に、



齊一藤佐

文化の紹復國力の振興は皆國民の精神に待つ。と仰せられたる點を深く考へなければならぬ。徒に多くの事を知るのみが能ではない。佐藤一

齋の『言志録』の中に、

人須らく自ら省察すべし。天何の故に我が身を生み出し、我をして果して何の用に

供せしむるか。我既に天の物なれば必ず天の役有り。天の役共せざれば天の咎必ず至る。省察して此に到れば則ち我が身の苟くも生く可からざるを知る。

といつてある。眞に吾等のために適切なる語である。

今日の日本は眞に多事多難である。しかし徒に多事多難を歎じて居ても、何の道も開けては来ぬ。吾等自ら奮つて此の多事多難の中を切り抜けて、新しい道を開いて行かなければならぬ。世界に冠絶したる貴い國體を有する日本國ではあるが、物質的には全く恵まれぬ國である。むかしの人々の少かつた時代には、まことに風景の好い長閑な國であつたに違ひない。

百敷の大宮人はいとまあれや櫻かざしてけふもくらしつ

といふ歌などを讀むと、いかにも長閑な氣分になるが、今では櫻かざしてといふやうな悠長な事は出来なくなつた。吾が國全體の面積は四萬四千三百三十五方里餘で此處に八千萬に近い人間が住んで居るのであるから、凡ての物質の缺乏して居るのは據ない

ことである。之を吾が國に殆んど十二倍する面積を有して、其處に一億餘の人を住ませて居る米國などに比べたなら、その生活の難易は到底比較にならぬ。英國の如きも本國は非常に人口が稠密であるけれども、世界到る所に屬領があるから、必要な物資はいくらでも之を取ることが出来る。獨、佛、伊等の國もそれ〴〵屬領があつて、而も人口稠密の度は吾が日本よりも遙かに下である。猶ほその上に吾が國は山が多くて平地が至て少いから、土地を利用することが尤も困難である。又南北に延びた國であつて、狭い中に氣候風土のそれ〴〵に異ふ所を含んで居るから、不便な事が少くない。此の如き困難なる國に於て人口は年々著しく多くなつて行く。今の有様で見ると百年間に凡そ三倍になるやうである。

斯く土地が狭く物資の足らぬ國に生れた者は唯だ人の力一つを以て凡ての缺乏を補つて行くといふ決心をもたなければならぬ。若し人の力が充分に發揮されなければ、國を保つことは出来ぬのである。然るに現在のところで見ると吾が日本人の體力は概

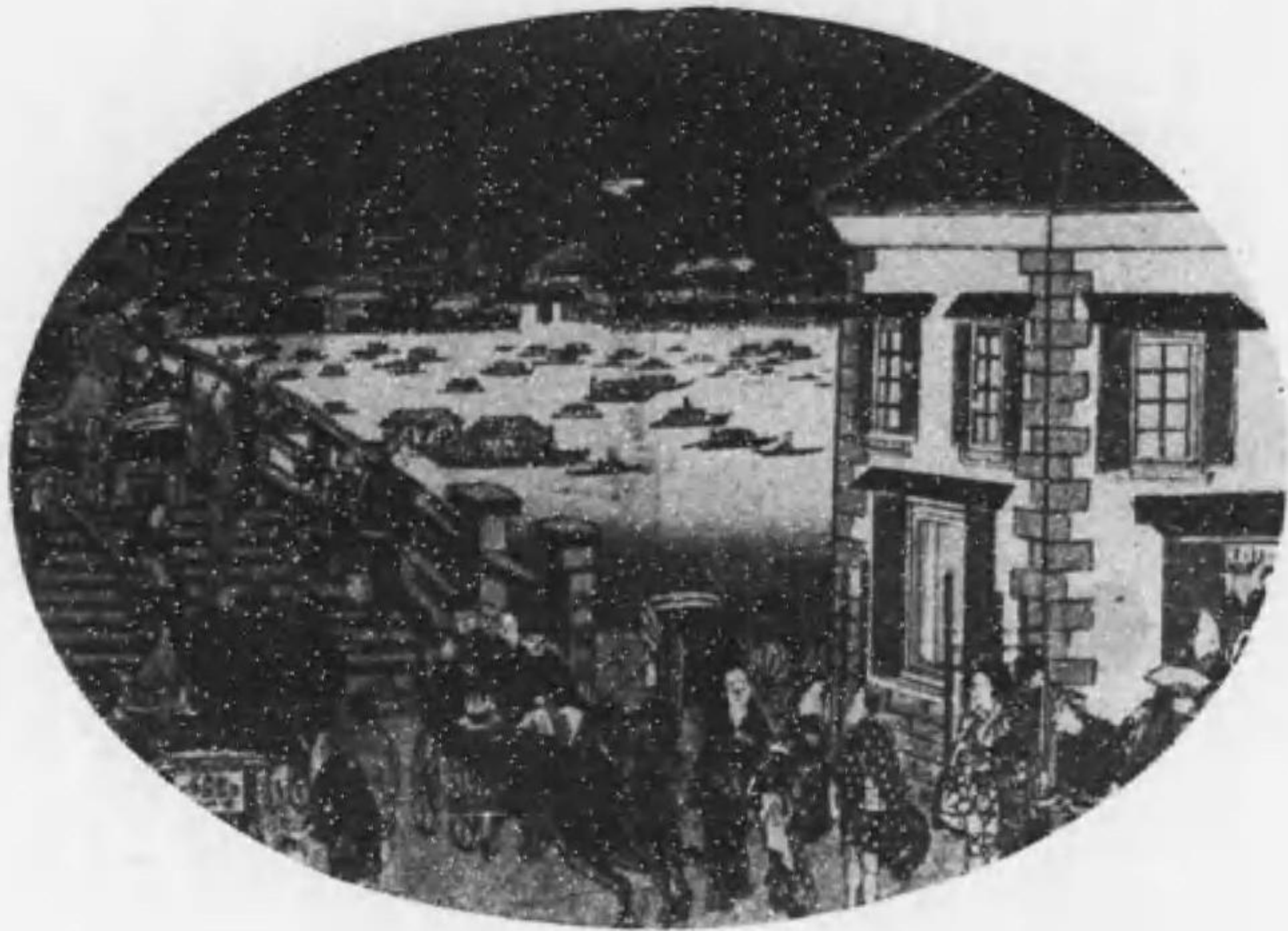
して歐米人に劣つて居る。残る所は心の持ち方一つといふことになる。心の持ち方一つで國の運命が定まるのである。然るに此の心の持ち方に於て、現在では非常に緊張味を缺いて居る。その原因はいろ／＼有らうが概していへば二點に歸するやうである。各自に深く此の二點に就て反省しなければならぬ。

其の一は今までがあまり樂であつた事である。世界の凡ての國が久しい競争の中で揉まれて來た間に、吾が日本國のみはツイ近頃まで何處とも競争するといふことは無く、至て平穩に暮して來た。それで一體の氣分が頗る優長である。生活の上にもいろ／＼冗な事ばかり多い。ステーションなどへ行つて見ても、いつもブラットホームは見送りの人で一杯になつて居る。斯んな優長な國は世界中何處にもない。近頃では『生活難』といふ聲が高いにも拘はらず、一體の生活振りは少しも緊張した所がない。殊に維新以來は幸運続きであつた。西洋人が數百年を費して作り上げた近世文明を、吾等日本人は格別の努力もせず片端から眞似て、僅々三四十年の間に大體彼等とかは

らぬ程の便利な世の中にしてしまつた。その上に戦争といへば何時も勝利であつた。其の戦争も、局に當つた人々の苦心は一通りでなかつたのであらうが、苦勞を知らぬ多數の國民は唯だ所謂戰勝氣分に浮れ騒ぐのみであつた。其後に於て經濟狀態は次第に不況となり、年々の輸入超加で國債は増すのみであつたのが、圖らずも歐洲大戰亂の勃發によつて少からざる利益を得た。此の利益は全く運命によるものであつて、國民の努力の結果でも何でもない。此の如き幸運の爲に國民の心が非常に驕り、自己の努力によつて自己の運命を開拓しやうといふ、健氣なる心持が殆んどなくなつてしまつた。今日世間に幾多の不祥な出來事が現はれて來たが、その病根の一は此處に在る。

今一つは西洋文明の外面のみを模倣したことである。如何に完全なものでも其の外面のみを模倣すれば弊あるを免れぬ。况んや西洋文明なるものは幾多の長所を具ふるとしても、決して完全なるものではない。それを急いで外面だけ模倣すれば弊害百出

の有様となるのに少しも不思議はない。しかしながら久しく世界と交通をしなかつた吾が國が、忽ちにして諸外國との交通をはじめ種々なる刺激を一時に受けたのであるから、全く眼の昏んだやうな状態で、取捨選擇の餘裕のなかつたのも、考へて見れば己むを得ぬ事であつた。『兎も角も諸外國の眞似をして、彼等と同じ程度まで進歩するやうに努めやう』といふのが其頃の所謂先覺者の考へであつた。さて眞似るといつても容易の事ではない。西洋諸國の學問技藝なり社會組織なり經濟組織なり、何れも一朝一夕にして出來上つたものではない。吾が國の鎌倉時代に相當する頃から數百年の間各國が相對立して競争を重ね、その競争の中から生み出したものが近世の文明である。然るに吾が國に於ては彼等の二十分の一程の歲月に於て、盡くそれを眞似たのであるから、充分に研究して居る暇もなく、勿論それに對して批判を加へる餘裕もなく、たゞ外面に現はれた所を片端から眞似てしまつたのである。此の如き状態が暫く續く間に、堅實剛健の風は亡び敦厚忠實の習ひは失はれ、たゞ新を追ひ奇を求めて、世の



俗風の年初治明

流行に後れざらんことをのみ競ふ者が多くなり、以て今日に及んだのである。斯くして人々の思想は大體に於て利那主義となつてしまつた。百年の大計どころではない、五年十年の後の事すら考へず、たゞ其日其日を巧みに送つて行けば宜いといふ風になつてしまつた。日本國民たるものは今日に於て大に反省し、慚愧しなければならぬのである。

斯く物質的に更に惠まれぬ國が精神的にも多くの缺陷を有し、外からは世界の諸強國の壓迫が加はつて來るとすれば、

多事多難の時代たることも當然といはなければなるまい。しかし吾等は光榮ある歴史を有する日本人である。吾等の祖先は多くの艱難を凌いで、此國を立派に擁護して以て吾等傳へたのである。又外國から傳へられたる學問、宗教、藝術等も吾等の祖先の力によつて盡く日本化せられ、其等諸外國には見られぬやうな立派なものになつたのである。其の子孫たる吾等が、たとへ如何なる困難に出逢へばとて、今に於て頓挫してしまふやうな事があつてはならぬ。今の世間に幾多の忘はしい事が起つても、國民の凡てが腐つたといふことは信せられぬ。たとへ少數の人でも、眞に「吾は日本人なり」といふ自覺を以て起ち、身を以て衆に先んじて上の大御心に背かぬやうな行ひをする者があれば、其處から廓清の機運は開かるべきである。

余は特に此際に當つて、吾が國の婦人に對して希望する所がある。余は日本の婦人には世界何れの國の婦人にも見られぬ所の美點のあることを信するものである。此の美點を養つて益々完全なものにせらるゝことを衷心よりして希望する。大正十二年の



大震火災當時の光景

大震火災の時の如きは、日本婦人の美點を知るに最もよい機會であつた。あの驚くべき大災害の中に於て、日本の婦人はまことに健氣に働いた。其時の有様を巨細に視察して歩いた或る英國人は次の如くに語つた。

日本人があゝの恐るべき天災を凌ぎ得た勇氣は眞に敬服すべきものであるが、特に余は日本婦人の勇氣に驚き入つた。余は東京の町々を可なり委しく視察したが、何れの處に於ても婦人はよく男子を扶け又殊に其子を保護して甲斐々々しく働いた。

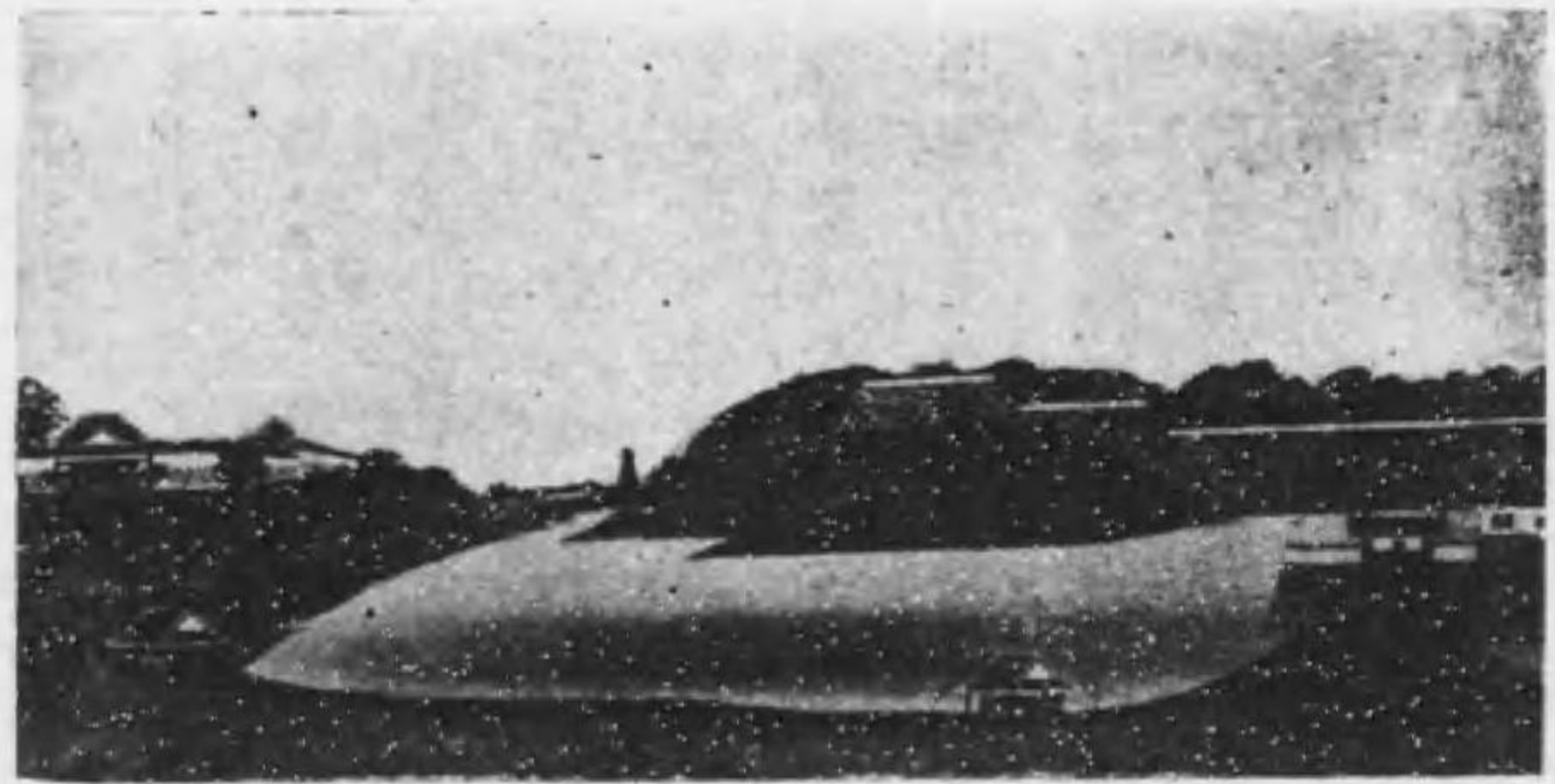
て居た。教育などは全く無いと想像せらるゝ貧家の婦人でも、泣き悲しんで居るものや、途方に暮れて居る者は全く無かつた。日本婦人の此の勇氣は吾々の本國の婦人も大に學ぶべきものであると思つた。

此の一人の批評は吾等の共に傾聴すべきものである。

余自身にも東京の下町の婦人達の働きぶりには實際感心した。西洋諸國では婦人の教育が非常に進んで居るといふけれども、何か不時の出来事の起つた時に、若い女などが男に取りついてオロ／＼聲を出して泣いて居るのは随分多い。ところが彼の大震災の際には、東京の下町の婦人にそんな者は全く無かつた。彼等は實によく働いた。能く様々の苦を忍んで其夫のために、又その子の爲によく働いた。彼等の中には全く教育も受けず、眼に一丁字も無い者がある。それが皆よく働いたのである。日本婦人の美しい特性は此際に於て圖らずもよく發揮されたものと思はれる。日本の婦人は昔から自己を犠牲にすることを知つて居る。苦しいことは自分が引受けて、その成功は

男のものにするといふ、誠に氣高い特性をもつて居る。此の特性が發揮されたのである。眼に一丁字も無い裏長屋の女房でも、一度此家の妻となれば此家のために自己を犠牲にして働かなければならぬといふ事をよく知つて居る。それ故に大なる天災にあつても、自分一身の安全を圖らうといふ念は無く、我が家の爲には身を粉にしても働かなければならぬといふ決心を以て、實に勇ましく活動したのである。此の如き貴い精神をもつた婦人に家の中の事を托してこそ、男子たるものは國のため世のために自分の努力を積むことが出来るのである。吾等が國家の爲に貢献したる多くの偉人傑士の身の上を思ふ時に、その陰に健氣なる婦人の力の潜めることを考へて、深く感謝しなければならぬのである。

萬延元年、三月の節句の日に櫻田門に於て井伊大老を要撃したる水戸浪士の中に、薩摩の有村治左衛門も加はつて居た。彼は水戸の烈公の知遇に感じて此の舉に加はつたものである。此の有村の母親の詠んだ歌に、



櫻田門外景

身をすて、君につかふる武士の母てふものはあはれなりけり

といふのがある。是こそ眞に偽らざる告白であらう。實際國事に奔走する志士の母たり妻たる人の境遇は悼ましいものに違ひない。しかし其の苦に堪へたる婦人達の力が朽ちず亡びずして残つて居ることを思へば、聊か以て慰むべきであらう。

此の如き日本婦人の美點は永く之を保全して失はぬやうに努むべきであるが、其の典型として仰ぐべき方々が皇室に多くあらせられたることは、特に吾等の記憶しなればならぬ所である。古の事は暫く措き、近世に至つて吾等の最も感銘すべきは和宮の御事蹟である。徳川氏の

末期に至り、幕府の意見と京都の朝廷の思召とが屢々衝突した。此間の融和を謀る爲に種々の計畫があつたが、將軍家茂の夫人として孝明天皇の皇妹和宮親子内親王を迎へることが策せられて、終に實現せらるゝに至つた。和宮は關東へ下らるゝ事を好まれず、いかにもして辭退したいといふ御意嚮であつたが、國家の爲であるといふので己むなく御承諾になつたのである。而して萬延元年、御歳十七にして關東へ御降嫁になつた。然るに一たび徳川家の人となられた和宮は全く自己を没却して夫たる家茂將軍に仕へ、時としては御自身に將軍の草履までも揃へられたといふことである。而も同棲せらるゝこと七年に充たずして、家茂將軍は慶應二年七月に薨去した。和宮の御胸中はどんなであつたらうか。其頃の御歌に、

世の中の憂さてふうさを身一つに取りあつめたる心地こそすれ

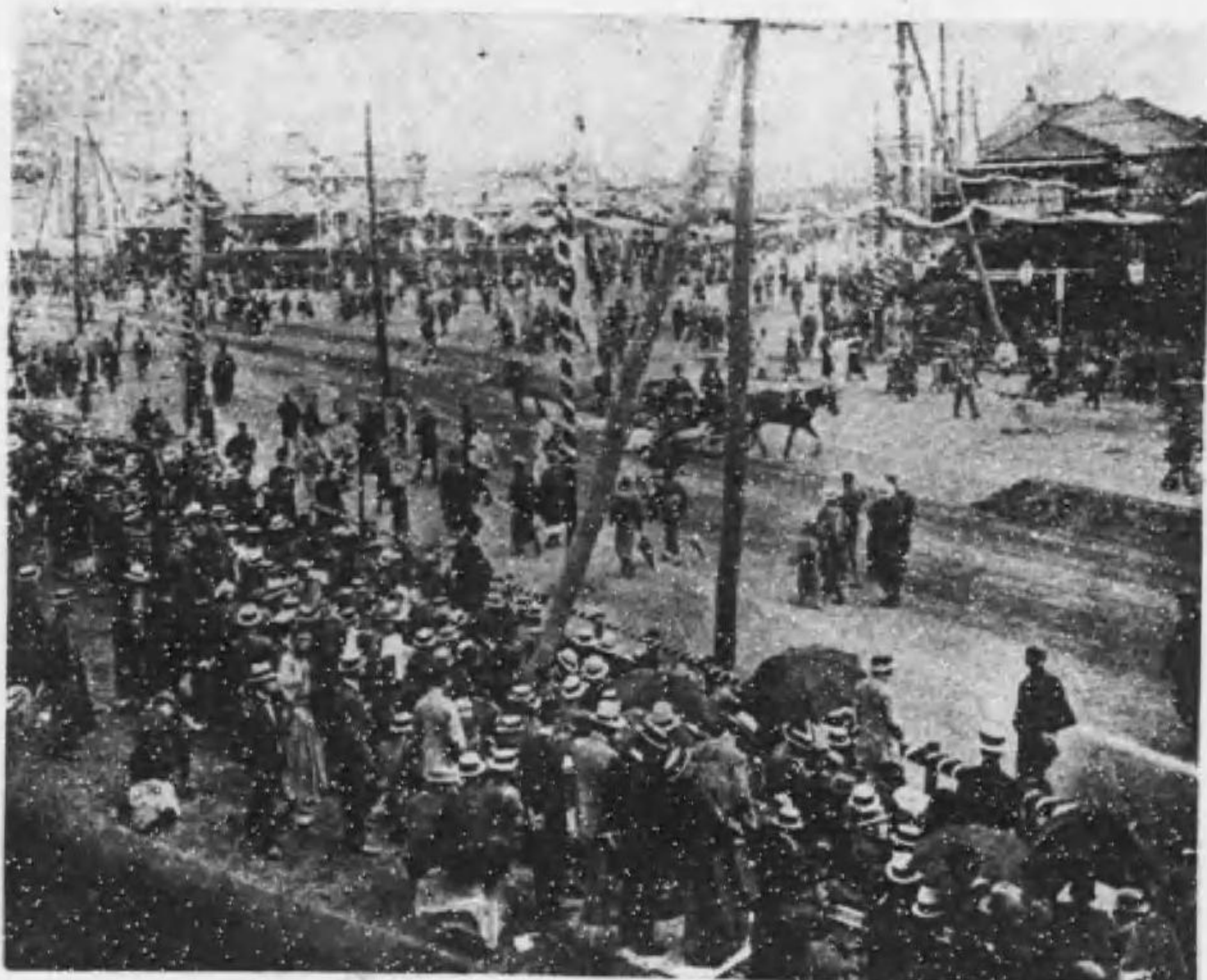
とある。眞に和宮の如きは其の混亂時代の犠牲となつて、最も華やかなるべき御年頃を最も寂しく送られた方である。此間に處して宮は天下の爲と御兄孝明天皇の御爲に、

全く御自身を捧げられ、而も優しく温い心を以て夫たる家茂將軍に仕へ、其の亡き後には

三つ瀬川世のしがらみの無かりせば君もろともに渡らましものを

といふ如き追慕の情を述べて居らるゝのである。誰か涙なくして宮の御事蹟を語るこ
とが出来やう。

昭憲皇太后の御徳に至つては、今更改めて申さずとも、日本國民たる者の誰も知悉
することであるが、特に余は其の御一生の間内助の御力の極めて大なりしにも拘はら
ず、極めて包まじやかに御過しになつた點を限りなく尊く感ずるのである。陛下は如
何なる場合にも、御自分といふものを表に顯はすまいとの御用意が周到であらせられ
た様に拜察する。明治天皇崩御の少し前の事であるが、御病狀の益々昂進するによつ
て、侍醫等の意見では玉體に注射をいたすより外はないとのことであつた。しかし天
皇の玉體に注射などをした前例もなく、いかにも畏れ多い次第なので、皇后陛下（即



明治天皇御大葬

ち後に昭憲皇太后)の御指圖を仰いだ。
時に陛下は「其義ならば何うて見やう」と仰せられて、天皇陛下に向はせられ
て、注射の義をいかに致さうかとの旨
を伺はれた。御重體の陛下の事とて無
論何の御答へも無かつた。そこで皇后
陛下は一同の者に「止めよとの仰せが
ないから、注射をいたして差上げても
宜しからう」と御許しになつたと申す
事である。一事が萬事である。此の如
くにして終始せられたる陛下の御一生
こそ、眞に日本婦人の典型と仰ぎ奉る

べきことではないか。
日本國民は確かに立派なる國民性をもつて居る。それが前々からいふやうな種々の事情によつて、非常に損はれて來てゐるけれども、決して泯び盡したとは思はれぬ。今此の多事多難なる時代こそは、其の復活し來るべき、否復活せざるべからざる時ではあるまいか。

雪中の松柏愈々青々、綱常を扶植するは此行に在り。

とは宋の忠臣謝枋得が國難に際した時の詩の句である。夏は凡ての木の葉が皆青い。雪の降る頃になつて多くの木の葉の落ち盡した中に、松柏のみは一層青々と見えるのである。吾が貴い國民性も艱難に逢つて初めて其の光りを發すべきものである。吾が國に内外幾多の難問題の群り起るのは、斯くして吾が國を大成せしめんと天意と見て、相共に奮起すべきである。

東洋の天地は益々多事ならんとして居る。東洋の問題が即ち世界の大勢を定むるも



農の圖

のとならんとして居る。此時に當つて東洋の先進國たる吾が日本が、國民全體の努力によつて漸く國力を充實せしめ、建國以來の大理想たる平和の精神を以て彼の歐米諸國に對し、彼等の勢力を控制して東洋の平和を確保し得たならば、實に愉快なことではないか。斯くして彼等歐米人は初めて人種的偏見を抛たざるを得ぬことを悟るであらう。又東洋諸國の人々も吾が日本の健氣なる態度に觸まされて久しい惰眠より覺め奮つて其國其國の實力を作ること努むるであらう。斯くして神武天皇の詔は二千



漁業の圖

數百年後の吾等の時代に於て、其の實現を見るに至るならば、是ほど愉快なことはあるまい。苟くも日本國民たるものは、其の地位身分の如何を問はず、此の大目的のために盡すことを忘れてはならぬのである。

人の生命には限りがある。いくら長く生きても百より上まで生きることがむづかしい。又其の生涯に種々なる出来事があつていつも笑つて暮すわけにも行かぬ。しながら自分の生きて居ることが決して無意味でなく、自分の働いた結果が國のため

世のために立派に役立つて居るといふ自覺があれば、如何なる苦勞の中にも樂みが認めらるべきである。仕事に貴いと賤しいとがあるのではない。仕事をする人の心の持ち方一つで貴くもなり賤しくもなるものである。人の手に持つものにはいろいろ有る。劍を持つ人、ペンを持つ人、鋏を持つ人、ハンマアを揮ふ人、十呂盤を弾く人、綱を引く人、車を牽く人、いろいろ有るけれども、魂を其手に込めた人の仕事は皆國の本を固くする力を有するものである。眞の日本人の活き方とは斯ういふ活き方をいふのである。其の人の屍は朽ちても、其の努力の結果は國と共に生きて残る。是こそ眞の不朽の人である。人々よ、共に奮つて吾等の事に當り、互ひに生きがひのある一生を送らうではないか。

一〇 世界の平和

平和は誰も望む所である。世界が全く平和になつて、軍備の如きは盡く撤廢するこ

とが出来たら、斯んなに有難いことはあるまいけれども、吾等は平和の夢を見て居てはならぬ。眞に世界の平和を來すべき堅實なる道に向つて一歩一歩と進んで行くべきである。明治天皇はいつも平和を以て念としたまひ、日清戦争の際の詔勅には

速に平和を永遠に克復し以て帝國の光榮を全くせんことを期す。

と仰せられ、日露戦争の際の詔勅にも、同じく平和を永遠に克復せんことを期する旨を仰せられてある。而も日露戦争の終つて後の詔勅に於ては、

偃武の下益々兵備を修め、戦勝の餘愈々治教を張り、然して後始て能く國家の光榮を無強に保ち、國家の進運を永遠に扶持すべし。

と仰せになつてある。平和は空想でなく、事實でなければならぬ。眞の平和を求むるには、一歩より一歩と堅實なる歩みを運んで行くことを忘れてはならぬ。

宗教の力、道徳の力が平和を進むるために最も必要なことはいふ迄も無い。若し凡ての人が皆神の如き心、佛の如き心を持つならば世間に争ひは起らぬであらうが、さ

ういふ時代は容易に來ない。間違つた心をもつて居る人のある間は、之を制裁して横暴な事をさせぬやうにすることが必要である。それが一般の平和のために必要なのである。佛敎の如きは慈悲といふ事を第一に大切なものとしてあるけれども、涅槃經などには「正法を護る者は刀劍弓箭鋒鏑を持すべし」と説いてある。即ち正義の爲の戦ひは己むを得ざる事として許してあるのである。但し余は今軍備のことを論ずるつもりでは無い。自ら其國の實力を養ふことが即ち世界平和の爲に最も必要であることを述べたいのである。

歐洲の大戦亂が起つた原因は種々に考察も出來やうが、獨逸の野心が其の重要な原因の一たることは争はれぬ。又メキシコに屢々内亂の起る時に、いつも北米合衆國の力が陰に働いて居ることは否定の出來ぬ事實である。其他何れの戦争に就て調べて見ても、或る國が自分の力を持ち過ぎて無理を徹さうとすることが其の重要な原因となつて居る。されば「力の強い國民に反省の足らぬ」ことが戦争の起る重大原因と

見てよいであらう。支那に相當なる反省力があつたら、日清戦争は起らなかつたであらう。露西亞に相當なる反省力があつたら、日露戦争は起らなかつたであらう。獨逸國民にモット自制心があつたなら歐洲大戦争は無くてすんだに違ひない。米國政治家にモット自制心があれば、メキシコもあれ程紛擾は無かつたであらう。此の道理は誰でも冷静に考へて見ればよく分ることであるが、實際の事になると往々にして冷静な判断がむづかしくなるのである。自分の國が富強になると自負心が起る。自負心が盛になると反省力が乏しくなる。さうして近くに弱い國でもあると、之に對して無理な壓迫を加へたくなる。それを見て居る他の國から、その壓迫の手を抑へやうとする。事態は次第に面倒になり、終に戦争ともなつて來るのである。

戦争は己むを得ずして起るものである。若し戦はずして他の横暴を抑へることが出來れば之に超す事はない。孫子は兵法に於て古今に比類のない人といはれて居るが、その語に



漢代水陸交戦の圖

百戦して百勝するは善の善なる者にあらす。戦はずして人の兵を屈するは、善の善なる者なり。

とある。兵備の眞の目的は他の國の野心を起させぬやうにすること。即ち戦を避くることに有る。戦ふのは眞に己むを得ぬ時のことである。殊に近代の如くに科學的の智識が悉く戦争に應用せらるゝやうになれば、戦争によつて與へらるゝ惨害は極めて大きく、戦争に費さるゝ金高は極めて多いのであるから、出來得る限り戦争を避けたいとは誰も考へて居ることである。昔アレキサンダア王は其の

少年時代に父王フキリップの戦勝の報を聞く毎に「私の勝つ國が少くなる」といつて歎いたといふが、今日では如何に野心ある英雄でも、斯んな考へをもつて居る者はあるまい。斯く何人も戦争を好まぬにも拘はらず、戦争が頻々として起るのは、畢竟野心のある國や自負心の強い國に對して、反省を求むる道が缺けて居るために外ならぬのである。

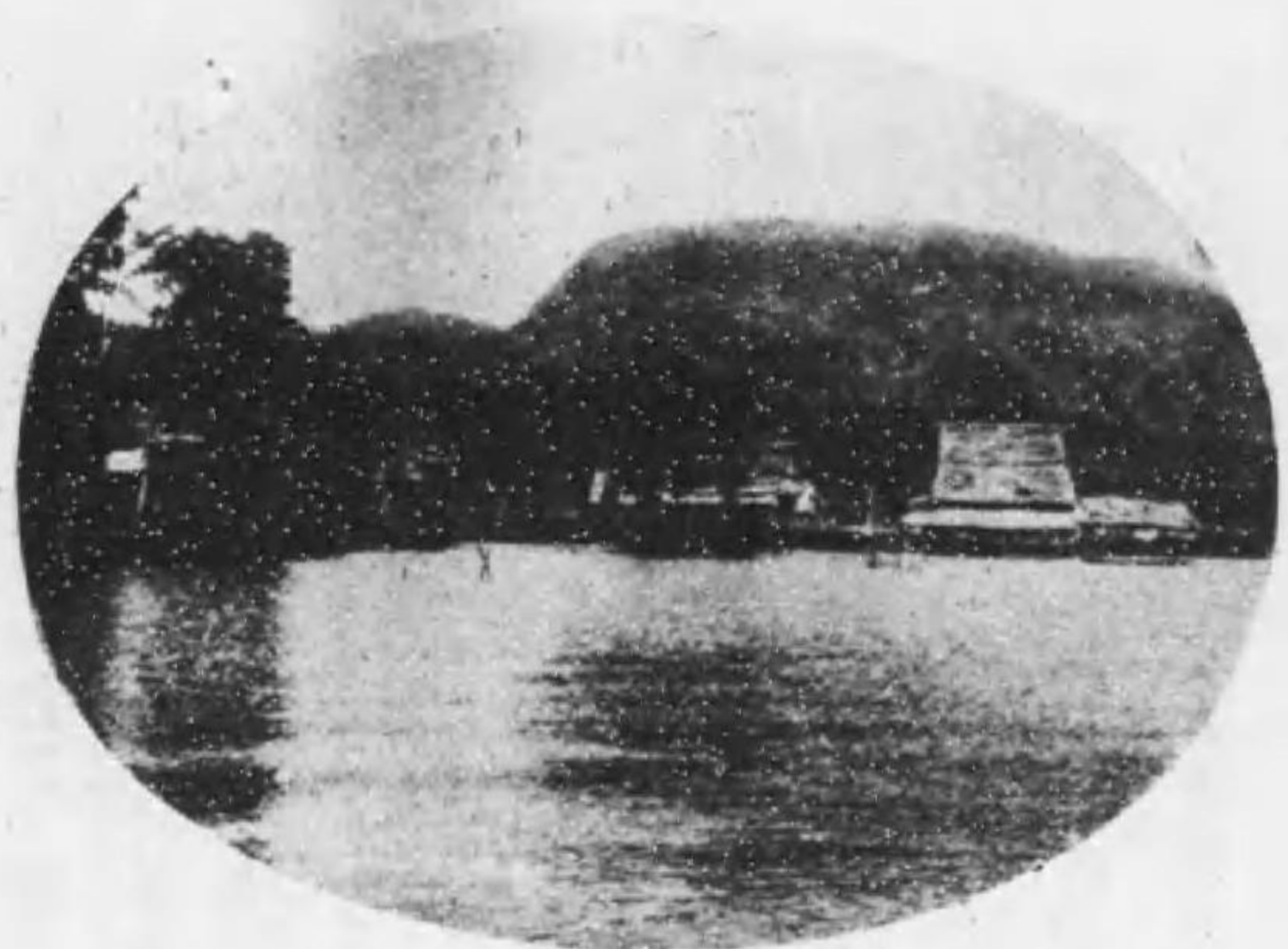
宗教や道徳の力によつて正義人道の重んずべき事を根本的に教へ込むことは無論必要である。又學問や藝術は萬國共通のものであるから、之によつて國民的偏見を除去するやうにして行くのも非常に善い事である。日本が露國を敵にして居た時でも、露西亞の樂聖の作曲にかゝる多くの名曲は吾々の耳を樂ませて居た。日本が獨逸を敵にして居た時でも、獨逸の碩學アインスタインは日本の學界に歡迎せられた。斯ういふやうな事は皆國際間の敵對の感を和げ、平和の機運を作るのに有効なるものである。しかし宗教道徳、學問藝術等の力が一般國民の思想に與へる影響は頗る徐々たるもの

である。之に比べて見ると經濟問題や政治問題によつて國際に起る競争は、非常なる急速度を以て進展するのである。それ故に各國民は其の徐々と影響を及ぼすものに頼つて居るだけで無く、他の野心ある國に對して乘すべき隙を與へぬやうに、自分の國の實力を充實すべく努力することを常に忘れてはならぬのである。余が前段に於て東洋諸國民の結束の必要を力説したのも此意に外ならぬのである。

或人は之に對して疑を挟み、東洋人の結束などいふ事を唱へるのは、人種的差別を愈々増長せしめ、人種的戦争の端を啓くものではないかといふ。是れは大なる誤解である。余は東洋人が結束して西洋人に反抗して起るといふのではない。暴を以て暴にかへよと勸めるのではない。西洋人は久しい經驗によつて、自分達は東洋人よりも優秀なるものであると自信して居るのである。「同じく神の子である」といふことを理解の上では知つて居るけれども、實際同等とは思つて居ないのである。其の惑ひを解くためには東洋人が實力に於て彼等に劣らぬことを示してやるより外に道が無いので

ある。又前々からいふ通り、彼等は久しく東洋に於て横暴な事をやつて其の勢力範圍を擴張して來て居る。之をいつ迄も黙認して居るのは、即ち其の不正を正義として許して居ることになるのである。故に既往は兎に角、將來に於て彼等に不正なことがあつたら、もう用捨せぬといふだけの氣勢を示すことは、獨り吾等東洋人の爲のみならず、實に彼等西洋人の爲なのである。

彼等が東洋の天地を我が物として更に何者に對しても恐れ憚る所なく、自由に活動を結ぶる時には、彼等自身の間にも烈しい競争が起り、結局歐洲大戦亂の二の舞をやることになるかも知れぬ。これは前段にいつた事である。もう一つ此處に恐るべき事がある。それは彼等によつて壓迫せられたる東洋人が堪へられなくなつて反抗することである。今迄の東洋人は概して無氣力であつた。隨て彼等白人の横暴なる舉止を黙認し、之に屈從するより外に道はなかつた。しかし無理がいつ迄も續くと思ふのは間違ひである。昭憲皇太后の御歌にも



南 洋 風 景

狭しとせせばあふる、川水のこゝろや民のこゝろなるらむ

とある通り、自ら恃みすぎで横暴なことをあまり長く續けた者は、盡く失脚に終つて居る。歴史はよく之を證して居る。堰かれた水の溢れ來る時の勢ひは恐るべきもので、何物をも破壊せざれば止まぬのである。されば久しく壓迫に壓迫を加へられ、殆んど人間扱ひをされなかつた者共が、とう／＼堪へられなくなつて一齊に起つ時が來たなら、其處に最も恐るべき人種的争闘が起らなければならぬ。彼等西洋人が此時に至つて悔いても、既に時は後れて居るのである。

小さい例は米國に於ける黒人の問題である。彼の黒人等は久しく白人の爲に壓迫を受け居る。その餘憤を漏す爲に時々白人に對して亂暴をする。白人等は之を捕へて殘酷なる私刑を加へる。それが又黒人の憤慨の種となるから、黒人は又時を窺つて白人に亂暴をする。斯ういふ事が間斷なく繰返される。是は極めて小さい範圍の出來事であるから、別段世界に影響を及ぼす程の問題にはならぬが、若し東洋方面に於て之に數百倍する人種的争闘が起つたとしたなら、實に戰慄すべき事ではないか。

それ故に今日に於て彼等白人に反省を教へ、人種的偏見を抛つことを教へるのは、實に彼等白人の爲なのである。余が東洋人の奮起を促し、東洋人の結束を唱へるのは世界の平和のためである。恐るべき人種的争闘を未然に防がんと爲である。吾が日本國は日露戦争の結果として世界の一等國の仲間入りをした。吾が國の武力は世界の共に認むる所である。又吾が國は久しく武家の全盛時代が続いて居た爲に、史上の美談といつても多くは武士に關するものである。小兒などに誰がエライ人物かといつて聞

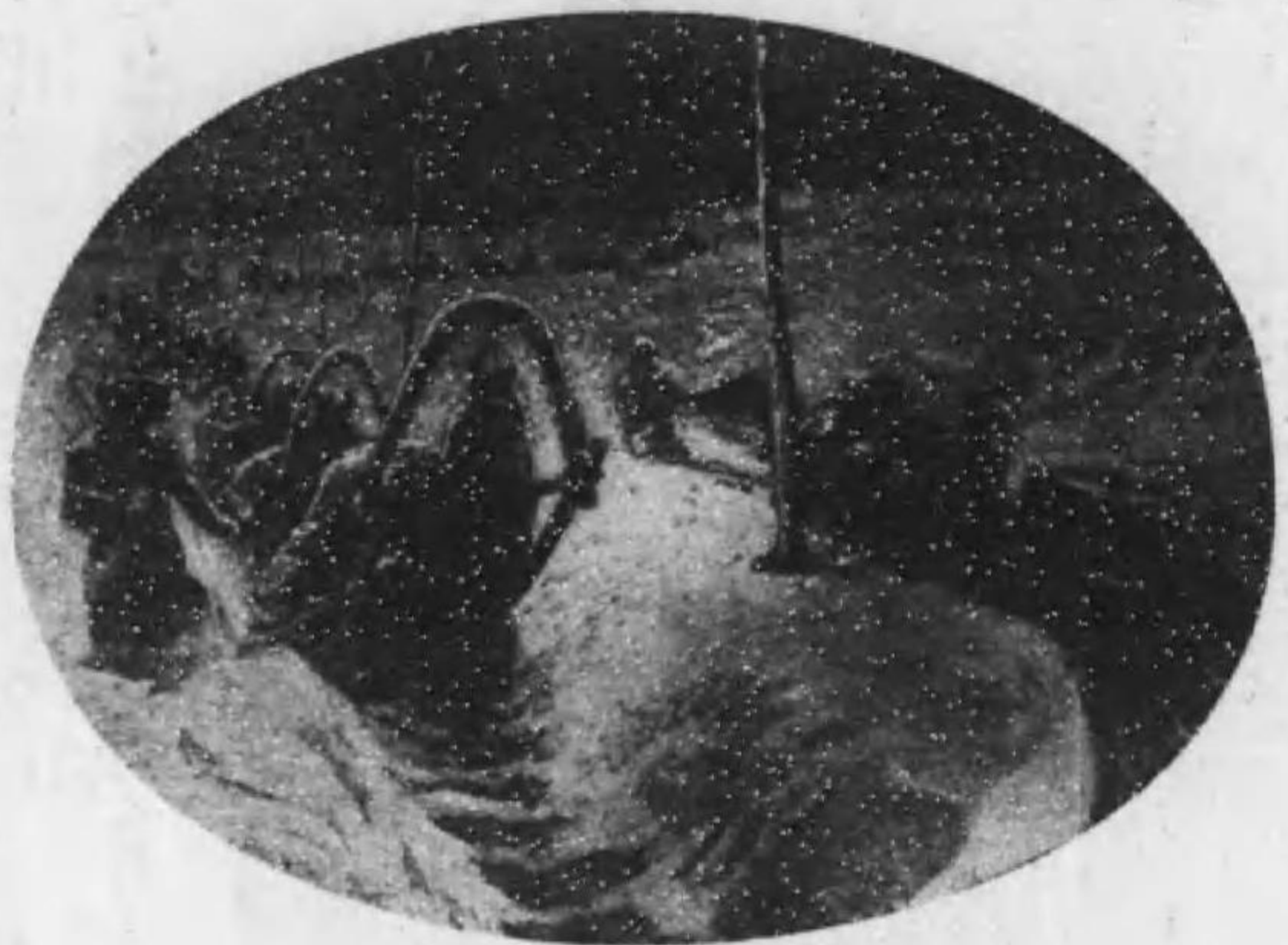


景 風 澗 臺

くと大概は太閤秀吉とか加藤清正とか答へるといふ有様である。その爲に外國人の中の或者は「日本は好戰國である、日本は専ら武力によつて其の勢力を擴張せんとする者である」などといつて居る。しかし此の如き批評の事實を誤れるものなることは、彼等が自ら反省して見れば直に分る事である。例へば最近二三十年間に於て、日本が一度たりとも自ら進んで戦争の原因を作つたことがあるか。世界の戦争は皆彼等白人の國が野心に驅られて自ら節制し得ざる結果として起つたものではないか。日本を好戰國と呼ぶ彼等自身が實際に於て好戰國ではないか。いかに詭辨を弄しても事實を蔽ふことは出來るもの

ではない。

日本の領土は明治維新以後に於て著しく廣くなつて居る。内地の面積は二萬五千五百五十餘方里であるが、朝鮮臺灣等の面積は凡て一萬八千九百餘方里である。即ち全國の四割三分ばかりは維新以後に於て加はつたものである。此等の事實を見て、日本に領土擴張の野心ありなどといふ疑ひを起すものも有るか知らぬが、それは全く誤りである。臺灣は支那よりして得、樺太は露西亞よりして得たが、何れも正義の爲に戦つた結果として得たもので、侵略的行爲によつて奪取したものでないことは、世界の共に認めなければならぬ所である。沖繩を併合し朝鮮を併合したのは、其等の國が獨立國たる實力を缺き、若し他の野心ある國の乗する所となるならば、其等の國民の不幸は勿論、東洋の平和を壞ることになるからである。彼の西洋の國々に於て屬領の民に對する態度と、吾が皇室の此等新附の民に對したまふ態度とは全くちがふ。世界の多くの屬領の民は甚しい差別待遇を受けて居るが、吾が皇室よりは全く一視同仁の



景の太樺

思召を以て凡ての民に對せらるゝのである。

朝鮮併合の際の詔書に、
民衆は直接朕が綏撫の下に立ちて其の康福を増進すべく、産業及貿易は治平の下に顯著なる發達を見るに至るべし。而して東洋の平和は之に依りて愈々其の基礎を鞏固にすべきは、朕の信じて疑はざる所なり。と仰せられた所は、着々として實行せられて居る。此處に吾が日本といふ國の特色が存するのである。

今日のところ東洋の天地に於て、國らしい國は吾が日本より外にないのであるから、吾

が日本國民は他の諸國を率ゐて起つだけの抱負をもつて居なければならぬ。しかし日本が諸國に率先して起つた以上は少しでも吾が領土を擴張する野心があるといふやう



朝鮮風俗

な疑惑を起させてはならぬ。それでは日本の立場を失ふのみならず、吾等の祖先を辱め、三千年の美しい歴史に泥を塗ることになる。吾等の態度は飽くまでも公明正大でなければならぬ。日本は眞に世界の平和を念とする者であるといふことを凡

て、多くの人を包容するには困難であるけれども、汎く世界に吾等を信用し吾等を敬愛する者を持つならば、たとへ此上に一寸の土地を得ずとも、物資を汎く世界に取り、



明治大皇帝演習御統監

吾等の努力の結果を世界に顯つて、永く國の繁榮を全うすることが出来るであらう。明治天皇は如何なる場合にも御心を緩められなかつた。世界の國々が共に驚歎する程の御事蹟を遺されながら、些かも其の成功に驕るといふやうな御様子はなく、日清戦争の後に於ても、常に「勝に狂て心驕つてはならぬ」と國民を御戒めになつた。而して御製の中には、

取る棹の心長くもこぎ寄せむ芦間の小舟さはりありとも
 と申すのがある。芦が茂つて居るために舟の障りとなるけれども、心長く棹をもつて
 其の障りを拂ひ除け拂ひ除けて行けば、やがて志す所の岸へ漕ぎつくことも出来る
 のである。さて吾が日本國民の志す所の岸は何處であらう。それは申す迄もなく建國
 以來の理想によつて、内には吾が國內の風紀を正し、國力を増進し、外には東洋諸國
 に率先して、漸く東漸し來る所の西洋諸國に對峙し、彼等をして人種的偏見を抛たし
 め、世界平和の基礎を固くすることではなければならぬ。

吾が日本は世界に類のない國である。民を以て子としたまひ、民のために御心を盡
 させらるゝことは神代より人皇の世にかけて一貫したる上の大御心である。菅家遺誠
 の第一條に、
 凡そ仁君の要政は民を撫するを以て本と爲す。民は神明の賚なり。本朝の綱教は神
 明を敬するを以て最上と爲す。神徳の微妙なる豈に他あらんや。

とあるが、歴代列聖の御心は此に外ならぬものと拜察する。此の御心に感激して各自
 に私を去り公に向ふの志を堅くする時は、如何なる時弊も除き得られぬ筈はない。
 吾等は今日に於て大に覺醒し、百難に屈せぬ所の勇氣を以て、高き理想に向つて邁進
 しなければならぬ。明治天皇の御製に

さし上る朝日の如くさはやかに持たまほしきは心なりけり
 とある。吾等も共に晴れやかなる心を以て、貴い大御心に副ひ奉るべく努めやうでは
 ないか。

大御心終

大御心の頒布に就て

吾等は日本國民として生れたる光榮を感謝しなければならぬと共に、また極めて重大なる責任を負へることを自覚しなければならぬ。吾等に此の感謝の念と此の自覚がありさへすれば、今の世の中が如何に多事多難であつても、必ず此の中を突破して、國運の發展を期するを得べきである。

申すも畏いことであるが吾等は上に仁慈にして尊嚴無比なる皇室を戴いて居る。吾等は祖先以來、御歴代の尊い大御心の下に育せられて、以て今日に及んで居るのである。此の大御心のいかに洪大無邊のものであるかを辨へなければ、日本國民たる光榮も、また其の重大なる責任も知り得らるべき筈はない。

然るに社會が次第に複雑になり、殊に外來思想の影響も少からずして、國民の思想が著しく動搖して來た爲に、此の尊い大御心を辨へ得ぬものも有るやうである。これ

は由々しき大事といはなければならぬ。本書の頒布は此の時代の急に應せんが爲である。

若し本書の巻頭に奉掲したる明治天皇並に昭憲皇太后の御物と其謹解とによりて、兩陛下御聖徳のいかに洪大なるものであるかを知り、更に本文に就て御歴代の大御心の如何なるものなるかを知り、世界の形勢と吾等日本國民の天職とを明にし得るならば、各自に今後の世に處する上に於て大過なきを得るであらう。是れ吾等が日夕大御心を奉戴して各自に其職務を勵み國威の發揚に努むべきを信する所以である。

本書の巻頭には
明治天皇並に昭憲皇太后の御物と説明とを掲げ、親しく御物を拜して兩陛下の聖徳を仰ぐの感あらしめ。

更に本文の十章に於ては
御歴代の大御心のいかなるものなるかを明にし

日本國民の天職と其の之を果すべき覺悟を説き

世界最近の形勢と日本國民の世界に於ける地位を細叙してある。

されば本書の頒布によつて、國民精神の向上に非常なる効果を生ずべきは申すまでもない事と考へる。幸に吾等の微衷を諒せられて、本書の普及に御助力下さるやう切望に堪へぬ所である。

大正十五年六月

奉仕會々長海軍中將

佐藤鐵太郎

大正十五年七月一日印刷
大正十五年七月三日發行

非賣品

著者 小林一郎

東京府下代々幡町字幡ヶ谷二一九番

發行者 奉仕會

右代表者 葛生仁三郎

東京市四谷區元町五十九番地

印刷者 日本紙業株式會社

不許
複製

發行所

東京市麹町區
飯田町六ノ二四

奉仕會

振替東京三七八〇番
電話四谷三四一〇番

終

